県と市町の地域づくり支援会議第１回尾鷲・熊野ブロック会議

１．開催日時：平成 19 年 5 月 31 日（水）
　　14：00～16：00
２．開催場所：県尾鷲庁舎５階　大会議室
３．出 席 者：尾鷲市長、紀北町長、熊野市長、
　　御浜町長、紀宝町長、知事ほか

（司会）

それでは、只今から「県と市町の地域づくり支援会議第１回尾鷲・熊野ブロック会議」を開催いたします。

私は、本日の司会を担当します、尾鷲県民センター県民防災室の渥美と言います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして、資料の確認を先にお願いいたします。資料のほうは全部で４種類ございます。一つは事項書でございまして、「県と市町の地域づくり支援会議第１回尾鷲・熊野ブロック会議事項書」というものです。それからもう一つは、同じく地域づくり支援会議の「設置要綱」でございます。それから三つ目が、本日講義をしていただきます渡邉先生のレジュメで「文化力に基づく地域づくり」でございます。そして、最後の四つ目が、その講義の中で使わせていただきます「日本文化産業戦略」という、この四つでございます。資料の確認のほうをよろしくお願いしたいと思います。

それでは、尾鷲県民センター所長の河井のほうより、開催の趣旨、本日の会議の進め方等について簡単に挨拶をさせていただきます。所長、よろしくお願いいたします。

（尾鷲県民センター所長）

どうも大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。趣旨につきましては、もうそれぞれ市町長さん方、ご案内のとおりということでございますので、割愛をさせていただきたいと思いますが、このセンターの所長私どもと市町長様方とのブロック会議、その下にそれぞれ推進会議なり課題会議というのを設けまして、具体的なことについてはまた検討していきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願いいたします。

本日は第１回目ということでございまして、知事のほうから若干お話をさせていただきまして、あと、三重大の渡邉先生のほうから「文化力に基づく地域づくり」というテーマ

でご講演をいただきます。そのあと、皆様方からいろいろご意見をいただきたいというふうに考えております。あとの意見交換につきましても、渡邉先生のほうでお願いをいたしておりますので、よろしくお願いをいたします。

それと、お手元にお配りいたしましたこのお菓子なんですが、これは古道センターが今年の２月にオープンいたしまして、このゴールデンウィークに尾鷲市さんの「夢古道おわせ」というのがオープンいたしました。そこで地元の３地区のご婦人方がランチバイキングをやっております。その時に出てまいりますデザートの一部でございます。非常に評判が良くて、連日早く売り切れる状況でございます。

まず並んでおります、この竹に入っておりますのが、三つの地区のうちの天満浦の百人会のご婦人方がいろいろ地域の特産を生かしてお考えになったもので、これは夏みかん、無農薬で栽培した夏みかんと地元で採れましたテングサでもって、甘夏みかんの寒天。それと、この白いお餅ですが、これは「猪ノ鼻餅」と名付けております。猪ノ鼻水平道というのがございまして、そこで採れるヨモギ、それと皆さんの手づくりのいろんなものでこのお餅を作っております。それともう一つ、この黒っぽいのはえごま餅。これは３地区のうちのななうらの郷、三木里とか古江とかそのあたりの地域の方が作っておりますところのえごま、これはシソ科の一種ですが、これから油も取れるということですが、非常に健康にいい食品、いずれも健康にいいものばかりです。あと、このお茶ですが、これも今仮に「三木里茶」と言っておりますが、三木里から賀田のほうを含めまして、地元の方々がご自分で作られたお茶を手摘み、手揉みで作っております。これはまだ販売はされておりませんが、これから「夢古道おわせ」のほうでこのお茶も売りたいということで、一生懸命頑張っております。

あと一つ、古道センターのところで向井の地区で向井フレンズという、この３地区の方々で１週間ずつ交代でそのお店を出します。今日は２地区なんですが、今日は向井フレンズの方が当番で、大変お忙しいのでお願いできなかったんですが、３地区の方がいろいろやってみえます。

このお茶も、お茶の水は尾鷲名水でございます。深層水から作ったのではなくて、八鬼山の水で点てたお茶ということでございますので、どうぞまた一度ならず二度三度訪れていただきたいと思います。

知事から先ほど「後ろがないじゃないか」と言われましたが、素人の奥様方に作っていただいておりますので、なかなか数が揃いません。ごめんなさい。

ということで、私のほうからのご説明は以上とさせていただきます。

（司会）

それでは、知事のほうから「県と市町の地域づくり」について、県の考え方も含めてご挨拶をさせていただきます。それでは、知事、お願いいたします。

（知事）

まずは、今日はお忙しいところ、皆様方にはお集まりいただいておりまして大変ありがとうございます。

今、地域経営につきましてはどこもかしこも大変だろうと思います。県もそうではございますけれども、心から敬意を表します。それからまた、今、県政は先般の選挙でお騒がせしましたけれども、二期目を担うことになりましたので、どうぞ今後の４年間、皆さんとお互いベストパートナーとしてやらせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、少し今日の会の趣旨に結びつくような形でお話をさせていただきます。市町村合併、それから主体的な行財政改革、これが進展をされてまいりまして、市町の行政体制が強化をされてまいりました。また、県と市町の役割も変化をしてきております。

こういう中で、昨年の 12 月８日に地方分権改革推進法が成立をいたしまして、いよいよ第二期の地方分権改革がスタートしておるところでございます。それから、本年１月に渡辺担当大臣のもとで「道州制ビジョン懇談会」というのが設立をされまして、そのビジョン策定に向けた動きも出て来ておるところであります。

道州制等についての考え方、ところどころで申し上げておりますけれども、私ども三重県といたしましては、道州制を議論する前提として、まずはこの国の形をしっかり議論するべきであると考えております。それよりも何よりも、まずは地方分権改革推進法に基づいて、今後３年間の議論のあと、新分権一括法が制定をされてまいります。そういう意味では、この第二期の分権改革、そして一連の議論の中で国から地方への権限移譲、あるいは国による関与の見直しであるとか、さらなる地方税財源の充実強化、これにしっかりまずは取り組んでいく。道州制はその上での次の議論に実際なって行くんじゃないかと、こう思っておりまして、これについては地方６団体と連携をしながら、我々としても一生懸命取り組んでいきたいと思っております。

その一方、実は条件に恵まれない地域の格差というものが拡大をいたしております。まさに大変地方にとっては厳しい地域経営を迫られております。私どもも、全国知事会等を

通して、市町の立場、これもしっかり踏まえ、また皆さんとも連携しながら、国にしっかり提言をしていきたいと思っております。

さて、その分権でありますが、地方分権では利点として、これまでの画一的な行政の仕組みではなかなか解決できなかった、実は地域社会の問題、これがそれぞれ地域の特性とか実情、これに合わせて、しかも多様な主体の連携によって解決できるのではないか。要するに非常に地方分権の大事な側面をとらえれば、そういうことが期待をされるところでございます。また地域では、多様な主体が活発に交流をしましてネットワークを結んで、そして地域の課題に対して自ら対応していける、そういう強い地域、これを作っていくということがもとより必要でございます。

このため、今日開催をしておる支援会議でございますが、最大のパートナーでございます市町と、そして私ども県が情報でありますとか、あるいは認識というものを共有しながら、ともに地域のことは地域で決めていくという、まさに本当の意味での地域主権社会の実現に向けた地域づくりが推進できるように、この会議を通してその成果を期待しておるところでございます。

実は、今、県では、今後の取り組み方向といたしまして、昨年 11 月に第二次戦略計画の中間案を公表しましたが、来る 6 月議会に最終案を出させていただこうということで、ほぼ出来上がってきているところでございますが、予定をしております。

それで、県土づくり、地域づくりのことについて少し申し述べますが、市町村合併が進展をいたしまして、市町が従来に比べて広域的なエリアの政策を担うようになってきているということ、それから一方で世界的な地域間競争が激しくなり、あるいは道州制の議論等も行われてくるというような状況の中で、特に経済界などでは県を越えた広域的なブロック化を意識した、そんな動きが顕著になってきております。

そこで、今、最終公表に持っていく第二次戦略計画でございますが、こういう県内外の状況の変化を受けまして、県と市町の役割分担を踏まえながら、中部圏であるとか、また近畿圏など、県を越えた視点を含めまして、より広域的な視点からこれからの県の果たすべき役割あるいは方向性、これをお示ししようとしております。

それから、市町におかれても、勿論こういった道州制に限らずいろんなブロック化の動きが出て来ております。そういうことに今やはり対応できるような、そういう高い行政能力を持っていただくということが求められておるところでございます。

そこで、今回第二次の戦略計画の中では、実は県域全体を対象にしました県土づくりと

いうのと、それよりも小さいエリアを対象とした地域づくりの二つの方向で取り組んでいくことといたしております。そして、県土づくりの行政については主体は県が担う、それから地域づくりの行政は主体は市町が担うということを基本にしていくとしております。勿論、この両者の連携がより一層必要であるということ、このことは言うまでもないことでございます。

そして、やはり三重県全体が活力と魅力あふれた県土となるためには、県土というのは、小さな小学校区というようなそういう小さな地域から市町の地域、そしてそれを越えた地域と連動した集合体でございます、従って、その地域がそれぞれ本当に活力を持って魅力的な地域として連続していくということがあって、初めて三重県全体が活力と魅力あふれた県土ということになるわけでございます。

そこで、そういう前提のもとで、県土づくりで国土形成計画でありますとか、あるいは道州制の議論、こういったことにも勿論的確に対応いたしていかなければなりませんが、その上で三つの視点というものを県としては持って取り組んでいきたいと思っております。

その一つは、県域全体または県域を越えた広域で取り組む、そういう視点でございます。それから二つ目に、県土づくりで培われた地域資源同士を互いに結びつけ、それらの価値を磨いて、これを県土全体に広げていく視点、これを二つ目に持っております。そして三つ目に、こうした取り組みを促進するための基盤整備の視点ということでございます。この三つの視点で県土づくりを進めることとしておりますが、併せて、こういった視点でもって蓄積された技術力をもとに新産業に挑戦をいたします、県北部を中心とした産業集積活用ゾーンという北側のゾーンと、それからもう一つ、恵まれた自然や文化を生かした取り組みを進める県南部を中心といたしました、自然・文化活用ゾーン、この二つの進行方向で県土づくりを展開してまいりたいと考えております。

ここは尾鷲・熊野ブロックでございますが、吉野大峰あるいは熊野三山、高野山の紀伊山地の霊場と熊野古道などの参詣道が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録をされたわけで、豊かな歴史・文化財を擁しておるところでございます。こうした紀伊半島に内在いたします、日本の精神文化のふるさととして親しまれてまいりました自然・歴史・文化資源を生かしまして、近隣府県との連携を深めてまいりますとともに、地域の農林水産資源というものを活用して付加価値を付け、ブランド化を進め、二次、三次産業との複合化を図りながら、観光交流産業の創出を進めたいと考えております。

さて、先ほどから申しております第二次戦略計画、これにつきましては地域主権の社会

の実現を目指してまいりますが、その際、県民の皆さんはじめ多様な主体が公を担って支えていくんだという、「新しい時代の公」の考え方を県の仕事の進め方のベースといたしてまいります。それからもう一つ、政策面ですが、経済的な価値だけではなくて、文化的な価値にも着目しながら、経済と文化のバランスの取れた政策へと転換をしていくという、「文化力」の考え方を政策のベースといたしてまいります。この「新しい時代の公」と「文化力」の二つの考え方をもとに、質の行政改革というものをしっかりと進めてまいりたいと考えております。

こういう認識のもとで、地域におきましては住民自らが主体的に地域に係わり、人と人とのつながりを深めるということを基本に、地域社会の再生や創造、これを目指しましてこの第二次戦略計画の推進に取り組んでいくということにしております。従って、今回出してまいります第二次戦略計画も、政策のベースは「文化力」、そして「新しい時代の公」にふさわしい進め方で展開をしていくということで、進んできておるところでございます。

さて、そういう中で、その中の一つのまた目玉でもありますが、「こころのふるさと三重づくり」ということについて申し上げていきたいと思います。実は今、伊勢神宮の式年遷宮の行事が盛んに行われております。今、お木曳き行事も非常に賑わって行われておるということでございます。それからこの熊野古道、これも今、世界遺産に登録をされました。特に伊勢と東紀州を結びつける高速道路等幹線道路についても、今、とにかくどんどん東紀州に迫りつつあると。こういうところでございます。

こういう地域というのは精神文化の源流とも言えるような、そういう日本の原風景と言いますか、それから出会い・交流のさまざまな文化を培ってきた、日本人の心のふるさと、日本文化のエッセンスという、そういう文化資源のあふれたところでございます。実は、「こころのふるさと三重づくり」の取り組みというのは、こういった地域に住む人々が自分たちの地域への誇りと愛着を再認識し、また訪れる人が心のよりどころを見つけ、心の豊かさを実感していただくことができるような、そんな地域を作るために、観光振興とイベントを一体的に展開して、集客交流や地域経済の活性化につなげていこうというものでございます。

今、イベント全体の基本構想、これを取りまとめる委員会を設置いたしまして、さまざまな分野の委員の方々にご検討をお願いしてやっていただいております。年内にはこの委員会の最終案が取りまとめられると考えております。そのあと、それをまたベースにしまして、県と市町、企業、有識者等、多様な主体が参画した推進組織を立ち上げてまいりた

いと考えております。そして、イベントとしましてそれぞれの地域で取り組んでおります地域づくりと効果的に結びつくように、その具体的な展開等についても市長さんや町長さんの皆様のご協力、また一緒になっての取り組みをお願いしたいと、こう考えておるところでございます。

さて、最後に、地域主権の社会を実現していくためには、これまでのような中央集権的な国の一方的な指導ということではなくて、我々県と市町がともに住民の幸せが実感できるかどうか、こういう視点から地域づくりに取り組んでいく、こういうことが必要でございます。この地域づくり支援会議におきましては、これからの地域分権の進展を見据えた地域づくりの方向につきまして、県民センター所長を県としては軸といたし、そして市長、町長様をはじめ、さまざまな分野の県と市町の職員が一体となりまして、地域の問題についての調査研究を行いまして、自立的で持続的な地域づくりの進展につなげていきたいと考えております。

以上でございますが、今日は三重大学の特命学長補佐の渡邉悌爾先生にお出でをいただきまして、このあとお話を伺うということにいたしております。そして、そのお話のあと、渡邉先生に進行をお願いして、地域づくりの方向について皆さんといろいろ意見交換をしたいと思います。どうぞ忌憚のないご意見をいただきますよう、お願い申し上げて、私のご挨拶といたします。ありがとうございました。

（司会）

どうもありがとうございました。

先ほどもお話がありましたけれども、本日は三重大学のほうから渡邉悌爾先生をお迎えしております。先生には、紀勢道整備に伴う地域活性化検討委員会の座長をしていただくなど、当地域として大変お世話になっているところです。本日ご出席の皆様におかれましては、よくご存知のことと思われますので、勝手ながら先生のご紹介につきましては省略させていただきまして、早速お話のほうをお伺いしたいと思います。

本日は、「文化力に基づく地域づくり」ということをテーマにお話を伺います。それでは、先生、よろしくお願いいたします。

（渡邉）

それでは、最初にご挨拶させていただきます。いつも大変お世話になっておりまして、２週間前にもこの場所に寄越していただきまして、先ほどご紹介いただきました紀勢道整備に関する活性化委員会の２回目の委員会にまいりました。ということで、本日お招きい

ただいたんだと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

一応、いただきました時間は30分ということですけれども、できるだけ議論の時間が多くあったほうがいいのではないかというようなことで、若干短めに、まず問題提起ということで、私なりの話をさせていただきまして、あとぜひいろいろと今後のために活発な議論をいただいて、お教えいただきたいというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それで、本日のお話のテーマといたしまして、「文化力に基づく地域づくり」というようなテーマを掲げさせていただきましたのは、理由としては、先ほどの知事さんのお話にございましたような、県土づくりの中で県としては、北のほうは産業集積活用ゾーンという位置づけで、南のほうについては自然・文化活用ゾーンとしての地域づくりというような、非常に明確な方向性を打ち出されておりますので、そういう趣旨に沿ったような形で地域づくりをされていくということに、少しでもお役に立つと言いますか、参考になるようなお話をさせていただいたほうがいいのではないかということを一つ思っております。

それから、もう一つ私なりにこのテーマに関して込めた思いなんですが、最近、特にグローバル化ということが盛んに言われるようになってきて、企業なんかも正規雇用がどんどん減って、非正規雇用がどんどん増えるということで、最近発表されましたところの家計の分配所得が平均的にだいぶ落ちてまいりました。そういうこともあり、それからニートですとか派遣だとか非正規雇用の人が増えるということもありまして、なかなか将来に対して若い人が希望を持てないというようなこともあって、非常に今、人々の心が荒んできていると言いますか、かなりこれから先のことを考えると大変なことではないかというふうに思うんですね。

そういう意味で、勿論世の中、経済社会のためには効率というものは大事なんですが、しかし、その根っこのところにやはりもっと大事な基礎的な社会を維持していく、社会を安定的に維持していくための重要な基盤がなければ、効率も経済も成り立たないんですね。実は、この間亡くなった東京電力の平岩会長さんがおっしゃっていたことなんですが、経済人が契約に基づいてビジネスをやる、そういうことの基盤にはやはり人々から支えられているんだと。社会のいろんなところから支えられていて、初めて経済もビジネスも成り立つのに、そういうようなことをもうちょっと世の中全体としてきちっと配慮しなければ、世の中の社会の構造が崩れて、そして人々の心が荒れていくということがあるんじゃないかと。そういった意味で非常にこの「文化力に基づく地域づくり」ということは、単に北

は経済がいいからというようなことだけではなくて、もっと社会全体として大事にしなければならない点があるんだということを、私はこのテーマの中に込めているわけでございます。

私の好きな座右の銘、「一隅を照らす者は国宝である」ということを蓮如大師が言っておりますけれども、やはりこのおいしい米を作るためにはきちっとした田畑の管理がされていなければならない。水についてもきちっと秩序よく水が行き渡るようになっていくための、非常に歴史的に培われた社会、地域の知恵というものがあるわけですね。

それから、「森は海の恋人である」というような言葉もございまして、例えば北海道の襟裳の昆布が、以前非常に品質が落ちた時期があったんだそうです。それは海に山の土壌がザーッと流れる、それで海が非常に荒れる、それで昆布の品質が落ちたと。これは、昆布の品質を上げるためには良い森づくりをしなければいけないんじゃないかと。そういうことで襟裳の森の再生をされた。そういうことによっていい昆布がまた採れるようになったということがあるわけです。

そういった意味で、やはり先ほど知事さんのお話の中でご紹介されたように、経済と文化のいいサイクルというものをきちっと維持していくというようなことが、やはり 21 世紀社会には非常に大事な観点ではないかと。そういうことが、私が本日「文化力に基づく地域づくり」というようなことをお話させていただく、もう一つの理由でございます。

このレジュメに書かせていただいたような基本コンセプト、これは戦略計画の中で挙げられているところを私なりに基本のところのエッセンスを取り出して、まとめさせていただいたものでございます。日本の精神文化のふるさととしてのこの地域を大切に守り育てていく、そういうようなことでこの地域から日本中に、あるいは世界に情報発信をしていくというようなことが、日本の精神文化のふるさととしての一つの新しくスポットを当てる理由であるというふうに思っております。

そのためには、やはり地域で歴史的に培われてきた、守り育てられてきた資源を活用するということによって、やはり高付加価値化を図り、そしてまた地域としてのブランドをはっきりさせて、それのブランド化を打ち出して、それを観光交流産業の新たな創出というところに結び付けていくということが、大きな方向性だというふうにまとめられております。

この場合、条件として非常に不利な面がございます。これは圧倒的に人口が都市のほうに集中をしている。そういう中で都市圏からの時間距離が非常に遠い。それとともに、人

口の流出があって担い手不足。担い手をどういうふうに確保していくかというような点で大変条件的に不利な面があるということでございます。そういう面はやはりこのいわゆる経済原理と言いますか、効率性というもので世の中の人の動きなどが大きな流れとなっている中で、そういったものを乗り越えていくためには、相当いろいろな手立てが必要になってまいります。

そのため、地域づくりのための支援機能、それは公共的な役割も大事でございますし、またそれをある程度は自立的な部分が芽を出すということとともに、その部分ではなかなか市場原理には乗らない、なかなかうまくビジネスになりにくいという部分を、公共的な面から、ＮＰＯやボランティアや地域の力を結集して補完をしていくというようなシステムづくりをどうしていくかというようなことが、課題になろうというふうに思われるわけでございます。

それで、次にまいりまして、実は今日、資料としてお配りをお願いしたものがございます。これは５月 16 日に、総理大臣が議長を務める「アジア・ゲートウェイ戦略会議」というものがございまして、ここから出された一つの報告がございます。それが「日本文化産業戦略～文化産業を育む感性豊かな土壌の充実と戦略的な発信～」というような資料でございます。アジア・ゲートウェイ戦略会議のほうは、これはこの文化産業戦略だけではなくて、重要項目が 10、アジアオープンスカイとか航空政策の転換とかいろんなことが書かれておりまして、その中の一つに「日本文化産業戦略に基づく具体的な政策の推進」という一つの項目がございます。

そして、重点７分野というのがございまして、それも源流・物流・ビッグバーン以下、国際人材の受け入れとか金融市場のこととかあるんですが、その中で日本の魅力の向上・発信ということと、アジアの共通発展基盤の整備というようなことで、かなりアジアを意識したような今後の政策的な展開のことがまとめて報告がされているものでございます。

そういう中で、やはりこの文化産業戦略というものが経済の大きな政策の一つの項目に出てきたということは、これは非常に注目していいのではないかというふうに思っているわけでございます。また、従来から県のほうでお進めいただいている戦略計画の中でも、非常に「文化力」政策、「文化力」に基づく地域づくりというようなことをかなり方向性として機を一にするところがあるのではないかということで、国のほうがあとから遅れて「文化産業戦略」というものを出してきたというのも、これは非常にこの地域の自然・文化活用ゾーンとしての地域づくりというような中で、一つの追い風にすることができるのでは

ないかというふうに考えまして、本日少しこの資料もお配りをさせていただいて、私の話の中に取り入れさせていただいたというような次第でございます。７ページぐらいの資料ですので、全部触れるつもりはございません。

その中で一つ強調されていることは、自らの地域の魅力を再認識し再評価をするということが出発点だというようなことが出ております。これは国のものですから、日本人自身が日本の魅力を再認識する、再評価するということが大切であるというような言葉で綴られているわけでございます。

これは考えてみますと、非常に歴史を持ったヨーロッパは世界の観光交流産業のメッカということが言えると思いますが、フランスやイタリア、イギリス、スイスだとかいろんな国がそれぞれ総合的な「文化力」というものが基盤にあって、そしてそれが地域の魅力になり、それぞれのお国の方々の誇りになり、そういったものに光が当てられて、それが海外からも評価をされるというような循環で、非常に大きな世界、観光の大きな地域になっているわけでございます。

やはり観光というのは、文字通り「光を観る」というふうに書きますから、やはりそれぞれの地域の人たちが自分たちの地域の光りを発見し再評価をして、そういう地域に魅力が向上して、それが外の人に評価をされ、外から人がたくさん訪れるということで、交流が生まれるというようないい循環ができて、だんだんとそれぞれのところのブランド価値が高まっていくということになろうかと思うわけです。やはり基本にそういった、自らも地域の魅力というものを分かっているようでなかなか分かっていないところがあって、その魅力というものを再認識する、それから外からも再評価されるということが非常に出発点として大事であると。

この場合、国の「文化産業戦略」の中で書かれていますことは、やはり日本は今まで「富国強兵、殖産興業」というのが明治時代、また戦後は「追いつけ、追い越せ」という高度成長政策、発展、そういうような時代の中で、日本人自身が忘れてきた、置き去りにしてきた、そういった多様性の尊重、自然と人々の暮らしの共生、そして物を大切にする“もったいない”の心、そういった価値観というもの、これがやはり日本の豊かな風土を作り、それが人々の豊かな感性を養って、そういったものが非常にきめ細かに品質のいいものを作り出していくというような基礎になっていたわけでございます。

“もったいない”精神ということについては、最近の環境問題の深刻化という中で、ケニアのノーベル賞を受賞されたマータイさんという大臣が日本にやって来られてから、何

年か前から日本でも新たに再認識をされるようになりました。実際、日本の食料で年間1,000 万トン以上の物が廃棄されているというようなこともございます。ほぼ日本の食料の生産量に匹敵するぐらいの物が同じように捨てられているというようなこともあり、それからまた、資源、エネルギーという問題に対応するためにも、やはりこの日本の“もったいない”精神というものは世界から注目されているわけであります。

そういう非常にきめ細やかな日本の文化といったものの基礎にあるものをもう一度見直すというようなことは、これはやはり非常に自然との共生、歴史・文化遺産、そういったものと共生をしてきたようないいものが残っている地域でなければ、なかなか実感されないものであります。そういったものを、歴史的に育まれてきた文化遺産とか景観とか、棚田とかそうだと思いますし、お祭りだとか、そういった伝統文化、それから多様な、非常においしい、ヘルシーな人の体に優しい食文化と言いますか、これも非常に重要な点でございます。

先日、千葉大学の先生が報告されているのが新聞に出ておりまして、朝、和食を中心に食事を取る家の子どもは、「非常に学校生活が楽しい」と言うと。そうではなくて、朝食を取らない、あるいは手抜きをするという家の子どもは、「学校生活が楽しくない」と。そういう非常に興味深いものがございました。やはり人の心を育てるために、こういう日本なりの文化、食というものを非常に大切にしなければならないというようなことが、新たに最近再評価されるような動きが出てきているわけでございます。

そういったような再評価に基づいて、地域資源を活用していく、そしてコミュニティの再構築をしていくというようなことを、これから日本として目指そうというようなことが一つ、この「日本文化産業戦略」の中に盛り込まれているように思います。

しかしながら、これは簡単ではございませんで、そのための基盤づくりが非常に大切であるということでありまして、そういう創造性とか、あるいは感性のある人材を育成していく、これも非常に大きな仕事でございます。また、そういったものを担っていく人を、指導者もそうですし、支えていく人、そういった人の発掘とか導入ということも必要ではないかということであります。それから、その地域の持っている魅力の発見とか評価、そしてそれを情報発信していく、それぞれ非常に激しい地域間競争という中で、非常に困難を伴うものであります。そういった基盤づくりということを含めて「文化産業」というような戦略を、これから国としても考えていこうというような、大変結構な一つの方向性ではないかというふうに思っております。

そのことをこの地域としてとらえて、どういうふうに伸ばしていくかというようなことにつきまして、少し熊野古道のことを中心にしてお話を展開したいというふうに思います。

紀勢道整備に伴うところの活性化会議の中で、非常に私が感じていますことは、勿論、都市からの時間距離が短縮されるということは当然追い風でございますし、今の時代には非常に大事な点だと思います。車で県庁のほうから来られる時間でも、やはり従来に比べて確実に30分ぐらいは早くなったということを皆さんおっしゃるわけで、非常に楽でございます。そのことも当然、最近の熊野古道に年間だいたい15万人ぐらいの入り込みがあるという状況がここ２、３年続いておるわけでございまして、これもやはりその道路整備というものが一つの大きな追い風になっているということは確かだと思います。

しかしながら、これは決してそれで必要かつ十分条件でないことは言うまでもないことでございますし、最近発表されましたところの入り込み客の分析の中でも、やはり近隣地区からの日帰り客が中心だということで、宿泊客があまりございません。多分バスで来られて、そしてその日のうちにバスで帰られるという客が中心なのではないかと思われます。

やはりこれも観光交流産業として、言わばビジネスモデルとしてある程度成り立っていく、そういうようなことは、この地域に担い手が発掘をされ、そして地域に雇用が生まれ、そして産業の裾野が広がっていくというために非常に大切なことであって、やはりこれも今後この熊野古道をどう生かしていくかという場合に、ある程度の時間消費ということを少し念頭においた仕組みづくりが必要なのではないかということを思うわけであります。

私が今申し上げることは、まったく十分なことではないのですが、私は、ぜひ森林業が、最近非常に中国あたりが輸入木材を随分消費するようになって、世界的な木材の輸入価格がだいぶ上がってきております。そうしますと当然、国産材が日本は高いと言われていますが、ある程度競争力がこれから出てくるのではないかというようなことが考えられるわけでございます。そうなれば、やはり森林整備のためにある程度、従来はその間伐だとか下刈りをする人がいないと。だから山が荒れてしまうというようなことにならざるを得ないわけですが、やはり古道を歩いて周りの山が非常に美しい森林に整備されていると、これはやはり熊野古道の魅力を高める大きな一つの要素になるのではないかというふうに思っております。

最近の木材価格の高騰というようなことがあって、先日の日経新聞に「林業に復活の好機」というような記事が出ておりまして、高知の３セクでここ５年ぐらい黒字が定着をし、若者が戻って来ているというようなことが紹介されていまして、そして間伐材の搬出量が

５年前に比べて５割上昇したというようなことがございますし、それから京都の森林組合、京都府南丹市日吉町の森林組合でも、５年前に比べて木材の搬出が５倍になったというようなことがございます。

そういうようなことで、全国的に少し林業も、何とか地域としてある程度の人を確保して、その整備をされることによって地域の魅力を高めるというようなことにもつながれば、これは非常に大きな一つの魅力のアップになるのではないかというふうに思われます。

そのようなことによって、地域に愛着を持つような人が定着をすれば、この地域の人を歓迎するようなムード、ホスピタリティというものも高まるでしょうし、それからまた今度、紀南の交流拠点のほうには温泉施設も整備されるというふうに聞いております。これもやはりこの地域の魅力づくりに非常に一役買うのではないかというふうに思います。

それから、最近、四国のお遍路、これも静かなブームになっております。やはり一度心を休めたい、体を休めたいというような中高年の人たちが随分お遍路を経験されるということもあります。そのブームに火を点けたのは、旅行情報誌であったり、ドラマになったり、そういうようなこともあろうかと思います。そういった点については、やはりもっとこの熊野古道に関しては和歌山県や奈良県とも協調しながらネットワークを作って、ぜひその客層というものを絞り込んだマーケティングに基づいて、どういう条件整備をすればビジネスモデルになるのかというようなことを、ぜひ一緒になってお考えいただいて、具体化をしていただきたいなというようなことを思っております。

そういうビジネスモデルとして構築をしていく場合に、やはりこれは観光業だけでもいけませんし、お役所だけでもいけませんし、本当に地域が全体として、総合産業として仕組みが作られていくということが必要でございます。そういった意味で、この地域の「まちづくり公社」というものも今年度からできた組織だそうですが、その先駆けになっていただきたいなというふうに思っています。

そのためにはやはり、総合的なプロデューサーというものもやはり必要であって、いろいろ大所高所からそういう専門的な能力のある人をどう取り込んで、そのビジネスモデルにしていくかというようなことを、ぜひ一緒になって考えていただきたいというふうに思うわけです。

私は、そのためにはこの基盤整備を公共で先導して進めていただくということとともに、やはり担い手を外から持ってくるというようなことも必要なのではないかと。ある地域では、実際、知事さんがその地域の出身の若者に直接手紙を出されて、そしてUターンを促

すとか、Ｉターンを促すとか、何かそういうようなこともされているというような例もあるそうでございます。あるいは今、国土形成計画の広域地方計画づくりが今年その時期になってきているわけで、そこでの情報によりますと、新たな都市と地方との交流スタイルというものを創出するということによって、人口が減少する中で２地域居住だとかいうような新たな仕組みを作って、外の人にもこの地域で活躍をしていただくというようなことで、その中には文化人であったり、芸術家であったり、あるいはメディアに強い人であったり、そういう情報発信の能力を持っている人、そういった人も外部のサポーターとして導入をするというようなことも、これも担い手を育てていくといった面で一つの方法ではないだろうかというふうに思います。

大分県に湯布院というところがございますね。湯布院は、何十年も前には圧倒的に別府が温泉としては有力な観光地であったわけですが、最近は湯布院とか黒川温泉のほうが非常に人々がたくさん訪れるようになってきております。湯布院なんかの場合も、やはり何人かの地元出身の若い人が、映画監督をしていて地元に戻ってきたとか、旅館の若者として戻ってきたというようなところですね。地域づくりのために非常に情熱を注がれて、映画祭をやるとか、牛喰い絶叫祭りをやるとか、いろんなことを仕掛けて定着してきたというのが、やはり湯布院なんかが最近非常に伸びてきた一つの理由になっていると思います。

そういったものを参考にさせていただくならば、そういうようなUターンとかＩターンとか２地域居住だとか、そういうようなことも一つの手段として、ぜひ従来発掘されていない、埋もれているような地域資源というものを、外の目から見てもうまく引き出して、そしてそれを総合プロデュースして情報発信をしていくというようなことで、やはり地域の担い手をだんだん育て引き継いでいくというようなことが、将来の地域経営ということのために非常に大きく役立つ大切な点ではないかと思うわけです。

「日本文化産業戦略」にも、文化産業とはどういうことか、いろんな切り口から書かれております。これだけにとらわれることはございませんが、それも一つの参考資料として、今後の主体的な地域づくりのために、一つのいい追い風が吹いてきたのではないかというようなことを考えるわけでございます。

一応、私の最初のお話としては以上とさせていただきまして、あとはぜひ議論の中で至らないところは引き出していただければ幸いと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

（司会）

先生、どうもありがとうございました。

それでは、只今から意見交換のほうに移ります。ここからは司会進行を渡邉先生と河井所長のお二人にお願いしたいと思います。それではよろしくお願いいたします。

（渡邉）

大変拙い話をお聞きいただきまして、司会進行というのも大変おこがましいんですが、それでは、尾鷲の市長さんから順番に、お感じになったところをお教えいただいて、議論を深めていただければと思いますので、よろしくお願いします。

（尾鷲市長）

渡邉先生の大変高尚な話を聞かせていただいて、ありがとうございました。

私が、先生のお話の中も含めて、これは知事が１期目から「文化力によるまちづくり」ということを言い続けてまいりましたので、そういう観点も含めて一つ二つ提案なりお願いをしたいと思います。

ちょうど昨年でしたか、ここでこの首長さんで、合併の前でしたかね、８市町村の時だったかも知れませんが、知事のその「文化力によるまちづくり」というテーマの中で私が申し上げたのは、確かまだ熊野古道センターが建設前でしたか、途中だったかも知れませんが、まさしく野呂知事が「文化力によるまちづくり」の一番具現的なのは熊野古道センターでありますと。だから、多分知事はこのセンターの完成をもとに、ご自分の提案している「文化力によるまちづくり」を県民の皆さんにお伝えしたいんじゃないかということを申し上げたことがあるんですが、私は、今でもその知事の思いというのは何も変わっていないと思うんですね。ですから、私どもはたまたま尾鷲市に立地していただきましたのでありがたいわけでありますが、尾鷲市にとりましても、この地域にとっても、この県立熊野古道センターというものをもとに「文化力によるまちづくり」をしたいと思っております。

それで、ちょっと個別的なことを申し上げますと、２月 10 日にできたばかりですが、まだまだこれからどう肉付けをしていくか、まだ私は完成と同時に新たなスタートだと思っております。ですから、いろんな意味でまだまだ不備な点も多いし、これからどうやって魅力を上げるかということを考えていかないといけない。

本来であれば、受託したＮＰＯ法人の方がもっと考えていただきたいのですが、私が一言二言申し上げますと、やっぱり全国から人を呼べるものを展示したいと思っているんです。これは知事のほうには要望いたしましたが、三重県立美術館にある曾我蕭白（そがし

ょうはく）の絵図をぜひ古道センターの展示研究所蔵棟の展示ルームに、そんなに広くないので多くの数は展示できませんが、ぜひこちらにその絵図を、県立美術館には相当数あると聞いておりますので、私も見てまいりました。ですから、展示できる範囲内で結構ですが、できましたら常設展示をしていただけないかなと。これはこれで、私は東京や大阪、名古屋の都市の住民に大変魅力があるのではないかと思っております。これは知事にお願いしておりますけれども、関係の皆様方にも、この熊野古道センターの魅力づくり、魅力アップという点で、ぜひ前向きにご検討いただきたいと思います。

それからもう一つは、「文化力」というのはいろいろありますが、今、尾鷲市が取り組んでいるのは、私はどっちかと言えば皆さんから見れば、伊藤はハード志向だろうと思われるんですが、決してそうではなくて、私はわりと小技もちょこちょこ考えておりまして、実は６月 30 日に「新宿ジャズフェスティバル in 尾鷲」というのをやるんですね。これはジャズは一頃に比べて日本では今ちょっと下火ですが、もう一度このジャズの良さを広めたいと。その発信点が尾鷲であればいいなというふうに思って、実はこの地域の出身者の方にお願いをしました。

昨年まず手始めに来られて、今年の６月 30 日には熊野古道センターの前の芝生広場で午後から、雨が降ると中止になるんですが、デモンストレーションという形で、あそこで東京の新宿ジャズフェスティバル in 尾鷲のメンバー、これはプロが 15～16 人です。ですから新宿に行ってそこで聞くシンガーとかメンバーですから、日本で通用する日本の一流どころのメンバーがゴソッと来るわけですので、堂々と全国に発信できるレベルだと思います。そこでデモンストレーションをやっていただいて、夜は夜で有料で尾鷲市民文化会館で７時からやるんですが、昼間の熊野古道センター前の広場では、当然アウトドアですので、無料で何人集まるか分かりませんが、ぜひ古道センターもそういう使い方をしてもいいんじゃないかなというふうに、古道センターにも連絡を取って企画をしておりますので、これは尾鷲文化振興会の名前でやるんですが、そういう形でこのセンターを使いたいと思っています。

それからもう一つ、これは全然話が違うんですが、私は「文化力」の中にはいろんな広い文化力というものがあって、木の文化も入ると思うんですね。もっと言うならば、日本の家が私は日本の文化だと思っておりますので、その日本の文化である日本の家を中国に輸出できないかなと、実は考えているわけであります。尾鷲市がたまたまご縁があって、７月に中国大連市金州区と友好都市を結ぶということで、三重県の観光局長にもご一緒い

ただくんですが、そのために事前に見識を高めてもらおうということで、実はジェトロと共催を行いまして今月 18 日に中国経済セミナーを行ったんです。

その時には木材と食料品あるいは水産物ということで、二つのテーマでそれぞれ講師に来ていただきました。その木材のほうの講師の方は、今いろいろと問題になっておりますが、林野庁の外郭団体で日本木材流通情報センターでしたか、ちょっと名前は忘れましたが、そのような名前で、そちらから中国人の方で講師の先生に来ていただいて講演をしていただきました。私もその講演に出て、その話だけ聞いたら、とてもこれは市に負える話じゃないなと。やっぱりこの話を成就させるためには、もう尾鷲の木とか東紀州の木とかではダメだなと。

今日、知事にお願いしたかった大きな一つは、三重県産材というテーマでこの中国市場をターゲットにしていただけないかなと。私は、やっぱり知事の「文化力によるまちづくり」の観点から言っても、あるいは知事の今までのずっと来られた人生のプロセスからも、三重県産材の家を世界に売り込むというのは、私は非常に合うのではないかというふうに思うんですね。ですから、勿論県が中心となって、この地域の市町あるいは松阪市や県内の中で林業関係の盛んなところ、そういうところが全部束になって、ぜひそういう話で攻められないのかなと思います。

実際に宮崎県や、あるいは秋田県、鹿児島県は、県として中国市場で出ておりますけれども、決してうまく行っているという状況ではないそうであります。しかしながら、先ほど渡邉先生が言われたように、中国の木材市場は少し成熟してきまして、もう輸入材に頼らないといけない時代で、日本の木材を輸出しても単価的に割りと近づいてきていると。ただ、その講師の先生の話では、丸太ではちょっと難しいと。もっと付加価値を上げた製品で送ったほうがいいと言っていましたが、中国の富裕層に対しては、デザイン性さえ良ければ必ず日本の家はこれから評価されて、市場があると言っているんですね。あとはどう組み合わせるかだけですので、ぜひ県でご検討して、これが三重県の文化であり、私たちの木の文化である、と結びついて行ければいいなと、一つ提言をさせていただきたいと思います。以上です。

（渡邉）

市長さんがおっしゃるように、私も実はさっきちょっとこの材木の輸入価格が上がってきたというようなお話をして、林業に追い風が吹き始めているということで、ぜひ今のようなお話を地域でお考えいただきたいという、そういう思いだったものですから、まった

く同じ方向でございますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

それでは、お隣の紀北町長さん、お願いいたします。

（紀北町長）

いろいろ紀北町が抱える県にお願いすることがいっぱいあっても、今日のこの場はそんなことを言っておってはいかんような雰囲気でございます。ですので、一つの提案的なものを申し上げるべきかなと。尾鷲市の市長さんがおっしゃるような輸出、中国を目指したスケールの大きな話ではございませんけれども、今、知事のおかげで近畿自動車道紀勢線が着々と進捗をしております。

その中で、先般の国交省と県と、それから奥伊勢を交えた８市町の関係者一同との会議の中で出たのは、大台町にあるパーキングエリアの運営のやり方でございます。それは、つまるところは今後、熊野川を新宮と紀宝町を渡す橋がかなり問題と言うか大事になっていまして、これは必ずできるだろうと。そうなった時には紀宝町にこの紀勢線が延びていく。そんな中で、この東紀州南三重の一つのストロー現象にならないという考えのもとにサービスエリアとかパーキング、あるいはハイウェイオアシスという考え方が今出て来ていて、議論されております。

そんな中で、どのような地域配分になるか分かりませんが、その８市町が寄ったところはまだ決定はしておりませんが、今後議論を待つんですが、運営の仕方だとか、それの新直轄道路におけるそれの建設のやり方、運営の仕方等がいろいろ大きな問題となってきます。それも一つの地域の「文化力」を社会に発信する場所でもあり、集客交流の一つの道具であろうと、そのように認識しております。そのへんについてはどうか県レベルの高い専門性から発するところのアイデアとかご指導を賜りたいと思っております。

この熊野古道が世界遺産に登録されて、もう数年経っていますけれども、その中でいっぱい期待に膨らんだ中で、新商品の開発等もいろいろ議論されてきました。もうぼちぼちとこの東紀州独自の創造的な商品開発が待たれるのではないかなと思います。

そんな中で、食文化であろうとも、あるいはまたここの地域の材木で作った木工品であろうとも、それは分野はまだ詳しくは考えておりませんけれども、この地域で産する材料を原料としたコンクールを開催してはどうかなと。コンクールはあくまでも優秀作品にナンバーを付けるだけではなくて、それは少ない数でも結構ですが、素晴らしいものについては数年をかけて、あるいは条件を決めて、数年先それがこの地域に根付くように助成をしていく方法がないものかなと、そんなことを考えております。

もう一つ許されるのであれば、「文化力」のことを言えば、私は20年以上前から抱いておりました美術館の建設であります。それには膨大な金がかかるので、それは非常に奇想天外な発想なんですが、それは今ある施設を使ってでも結構ですけれども、日本の芸術文化に対する一つの改革案として、若い時から東京あたりの美術評論家と議論をしてきて、既存の展覧会に飽き足らず、新しい、どこからでも参加できる、それから日本の特徴としての徒弟制度的な美術界、書道界、いろいろな世界の構造を改革していこうじゃないかというのが、ここの美術館建設の最大の理由なんです。

いろいろその展覧会に自由に参加できて、しかも経費をかけないでやろうということは、つまり一つだけ申し上げますと、参加されて合格した作品の売買はその場でやるんです。手数料をいただくことによって、その手数料が運営費になっていくというような仕組みを作っていこう、流通をもっと簡単に、透明性の高いものにしていこうというふうなことを随分と考えて、議論しました。それを今私が申し上げると時間がありませんので、漠然とそのようなアイデアをこの場で発表させていただきます。以上です。またあとで詳しいことは述べたいと思います。

本当は、私は紀伊長島町時代ですが、紀伊長島町へ美術館を建てようと思った。つまり、この地域へ全国から人に来てもらえる、その美術展はもう日本にない美術展をやろうと。金がないからできないですけど。そのアイデアはそういうことなんです。町かど美術館みたいなものじゃなくて、100億円ぐらい使うものです。そんなことを考えてまいりました。しかし、それはお金がないですから、既存のものを使ってもいいんですよ。以上です。

（渡邉）

それも一つのものとして考えていくということですね。

それでは、熊野市長さん、どうぞ。

（熊野市長）

知事が言われた話、それから渡邉先生が言われた話、まったく方向性としてはおっしゃられるとおりだというふうに思っています。新しい熊野市になって、今、総合計画を策定するために、先日、市民2,000人を対象にしてアンケート調査を行いました。その際に、やっぱり現状の評価ということについては、自然豊かなところで暮らしたい、しかしながら、働く場所がないからどうしても外に出ざるを得ないだろうというような高校生のアンケート調査の結果が出ておりまして、できるのであれば地元で暮らしたいということです。やっぱり自然豊かな地域が好きだという、そういうことが出ているので、やっぱりこの方

向性として自然・文化を活用した地域づくりというのはまったくそのとおりじゃないかなというふうに思っております。

ただやっぱり、文化と経済のバランスというお話もありますし、私が市長になって「花いっぱい運動」を始めて、今、熊野市の国道 42 号線は３キロぐらいにわたって花できれいにされていますし、オープンガーデンについても全国的にも非常に誇れるレベルになってきております。これはもう全部ボランティアでやっていただいていますから、ある意味では「新しい時代の公」であり「文化力」だと思うんですが、「花いっぱい運動」を始めた当時、「花より団子」だと。これだけ疲弊している経済の中で、市は何でそんなものに金を使うんだと。随分そういう批判を受けまして、それに対して言ったのが、やっぱり団子だけよりも、花のある団子のほうがおいしいし、高く売れるんじゃないのかと、随分説得をして、その説得が効いたというよりも、花の美しさそのものがその「花より団子」と言っていた人たちの声を少しずつ小さくしているところがあります。

ですから、文化で生活できるかという声は必ず出てくると思うんですが、我々がしっかりと方向性をぶれずにもって進めていく必要が、これは我々の責任としてあるんだろうなというふうにまず感じた次第ですし、おそらくこういう方向性については東紀州の市町としては同じ意見ではないかなというふうに思いますので、まずこれを共通認識にすることが非常に大切だろうなと。住民レベルまで共通認識にすることが、我々としてまず第一にすべきことじゃないかなというふうに感じさせていただきました。

で、もうあまり話すことがないわけです。要するにここに書いてあることがまったくそのとおりだと思っているので。むしろ、ここに書いてあることをどうやって実行するかという段階でなければいけないと。例えば渡邉先生の地域資源活用のところで、１の二つ目の四角のところ、「ブランド化」と書かれています。この地域のブランドって何だろうということですね。そういう議論がまだされていない。「ブランド化」というのは言葉としては分かるんですが、どういうブランドにしていくかという共通認識がまったくないわけですし、取り組みも始まっていない。

それから、熊野古道をどう生かすかというところで、ホスピタリティの話があります。先日も南三重の活性化の検討会議がございました。この地域の皆さんは、基本的には非常に温かい人間性だと思いますが、それが表に出てこない。表に出すために何をしなければいけないか。熊野市で一時、「おもてなしは挨拶から」というキャッチフレーズで始めたことがあるんですが、役所の中だけで一般の方にまで浸透はしなかった。私が言いたいのは、

やっぱりどうやって温かい人間性を表に出すような仕掛けを行政として共通に考えていくのか、広域的に取り組んでいくのか、やっぱりそういう段階の話を我々としてはもうしなければいけない時期だろうと。熊野古道のお客さんがこのままでいいのかと。やっぱりもう少し増やすためには、土俵となる部分のてこ入れというものが、まさにその「文化力」の発信として、一つはこの地域の人間性を知っていただくというのは大切だし、そういうことを通じていろんな仕掛けが出てくるのではないかなというふうに思っています。

あと、細かい話を言えば、和歌山県とのネットワークづくりというのも多分非常に大切で、先日もある人と話をしていたら、古道の地図が三重県側は伊勢路で切れると。和歌山県側は紀伊路でパッと切れてしまって、和歌山県側は熊野古道の紀伊路で切れてしまって、伊勢路のどこに連結しているかがまったくない。要するに観光客の視点で見た時につながっていない。そういういろんな、やっぱり我々が反省してみなければいけない点というのはまだまだたくさんあるわけですね。そういう具体的な実行レベルの話をもう少ししていく必要があるのかなというふうにちょっと思っています。

あまり中身の話がなくて申し訳ないんですが、とりあえず第一段階ではそれぐらいです。（渡邉）

どうもありがとうございます。今おっしゃった、実際、和歌山のほうに非常に宿泊客が多いわけですよね。ですからもう一泊して、和歌山の勝浦とかどこかに一泊してもらってもいいんですが、できれば三重県側のほうでも一泊していただく、そのために何が必要かというようなことが、今のお話のブランド化であるとか地図を一緒に作るとか、やはりお客様の視点というところでもう一度見直すことが必要だろうと思います。

そのへん、やはりなかなか地域の人だけで気が付かないところがあるので、外の人も入れて、お客さんに喜ばれるような非常に便利な地図を作る、地図を作るためのどういうコンセプトにするかというようなことも、そこで住民レベルと役所レベルの交流が深まるわけですね。そのへんをまず取り組む、取り組めば必ず方向性は出てくるだろうというふうに思いますけれども。

ホスピタリティだと、そう思うんですね。実際、この地域にお金を外の人が落としていただくための、というような体験が出てくれば、必ず大事にしようということになるわけで、やっぱりそういう実際の場を具体的に作っていくということが第一歩だろうなと思うんですが。

それでは、御浜町長さん、どうぞ。

（御浜町長）

皆さんのお話の一つひとつが大きなテーマでございますし、ただ、「文化力と東紀州」あるいは「文化力と紀伊半島」と、そういうふうな言葉とも思うんです。「文化力」と言っても、享受する側からすれば、「文化力」というのは個人個人にとっては自分たちの生活を豊かにしたり、意義あるものにしていく、そういうことだと思いますし、地域活性化という観点からすれば、「文化力」を飯のタネにするというふうな、そういうことでありますから、大変な注意とセンスが必要とされるというふうに思います。

これまでの市長さん、町長さんの言われたことに絡めて言えば、古道センターをどうやって活用していくか、あるいは我々南郡・熊野で言えば、これからできます紀南中核的交流センター、それをどうやって活用していくかというようなことなんですが、「新宿ジャズフェスティバル in 尾鷲」の話も大変おもしろいと思うんですよ。例えば古道センターのあれだけの木造建築だったら、例えばアメリカのアイビーリーグの学術的な合宿、そういうものを持ってきて、例えば夏場のある時期には学術村になると。サンタフェのサンタフェ・インスティチュートではありませんが、そういうふうなことは僕は可能だと思います。そのための宿泊には、当然紀南の中核交流センターの施設も活用することになる。

我々が何でもって「文化力」と言っていくかということなんですが、例えばその熊野古道は、この配付された資料を借りて言えば、まさにアジアのゲートウェイでもあると、そういうふうなとらえ方ができると思いますし、熊野古道の我々のこの熊野の地がどのように喜ばれるかと。私はその千年の値打ちを言っているわけだから、これから千年後の西暦3000年の熊野古道をイメージできるような、そういう構想力が我々に必要とされているんじゃないかというふうに思うんです。そういうふうな観点を導入した場合に、熊野古道の見え方も違ってくるし、表面的な熊野ではなく、ディープな熊野、それはその山、川、海や営々と続いてきた里とか、そういうものを含めた全体的な精神性、あるいはその聖なるもの。その「聖なるもの」というふうに言った時には、お伊勢さんと熊野信仰、三山を結ぶ花の窟もあって、４場所を言うべきだと思いますが、熊野信仰の二大聖地をつなぐ、そういうふうなルートが伊勢路あるいは中辺路、大辺路、大峰道、そういうふうなことの中で、特別な意味を持って我々の伊勢路のルートが表現できると。

その伊勢路ルートについては、しつこいですが、「伊勢・熊野路」というふうな、そういう呼称を本当にみんなでやれば、私は、信濃路とか芭蕉の奥の細道とか、そういうところに負けない場所の特定される力があると思うんです。それはおそらく観光資源として考え

て、それがいくらになるのかというふうなことで言えば、電通や博報堂に試算させたら、僕は何百億という値打ちがある名称じゃないかなということも思います。

私は、今例えば県の大きな金でできるその二つをどうやって利用するかという意味では、我々の熊野を改めて次の千年に向って耕す、そういうふうなきっかけが現実にもう与えられているんだというふうなことだと思いますので、ぜひそういった世界の、その時期には学術村になると。そのためには一流のものをともかく引っ張ってくる。そして、真似してもらう。お金を落としてもらうのもやっぱり金持ちにお金を落としてもらわないといけないと思うんです。それで地域を開発して、金のない人も来れるというふうな、そういう段取りが必要じゃないかというふうに思います。

熊野古道の特徴の中で、我々南郡・熊野は七里御浜を持っておりますが、そこを車椅子で歩ける熊野古道にぜひ整備する案を、県の力を借りて国等に要請したいというようなことも思っています。それは21世紀の福祉のそういうふうな時代を考慮した時に、峠、峠を健常者だけが行けるのではなくて、松本峠から見た七里御浜、鳥瞰図で見る素晴らしい景色の中に原始的に足で入れる、そういう熊野古道でありますが、そこは車椅子で歩ける熊野古道に十分できる、そういうふうな場所でもあります。

そういった意味で、新たな意義づけをしていくためにも、渡邉先生なんか学術の方面で来られた方からすれば、おそらくそういった世界の学術の時期的なそういうものが行われる場所に、僕は尾鷲の古道センターだったら誇れると思います。彼らによってまた新たな発見がされる。我々自分たちで自分たちのところを発見するというのはなかなか難しいじゃないですか。そういう意味で、交流の中で自分たちのこういうところが磨かれていくということですし、紀北町長さんの美術館の話もすごくおもしろいですね。私もピカソの模写をやっている、素晴らしい、ピカソが描いたとしか思えないような模写があって、そのピカソの模写美術館を熊野古道の田舎のほうの公民館とか古い石垣のあるようなそういうところに持ってくれば、力が拮抗するというふうな、そんなことを思ったりします。そういう意味で、我々がそういう今与えられたそういう核を利用して、お金が引っ付いてくるソフトを開発していくというのは、大いにあり得るのではないかと思って、こういう話をするとワクワクしてくるんですが、嬉しくなります。

（渡邉）

ありがとうございます。ぜひ、前から町長さんがおっしゃるように、「伊勢・熊野路」という言葉の定着、これはやはり非常に大事な共通する部分だと思います。県は、三交を中

心にして、観光を情報発信するような企業の育成もされているので。

（御浜町長）

知事が、北のほうと南のほうと言われました。北のほうは、たくさん外国から来られた方も含めて、たくさん働いておられる方たちがいます。我々東紀州のほうは、その人たちの癒しの地にもなると思います。名古屋、大阪、東京、そういうところの人たち、あるいは世界から人を迎えると同時に、近場の癒しの場としても大きな市場にもなり得る、あるいは三重県の南北交流を図っていく上でも、意識的にやればなかなかおもしろいんじゃないかというふうに思うんです。どうしても松阪から向こうの人は、名古屋、東京方面あるいは大阪方面を向いて、東紀州は背中になるじゃないですか。後ろを向かないとこちらじゃないという、それだけでも位置的な、心理的な遠さがありますが、実は平成25年の高速道路の開通までに、我々はそういう意味で用意しておかなければいけないことが山ほどあるような、そんな思いがいたします。

（渡邉）

交流によって新たに外の人に発見をしていただくというような呼び込み方ですね。いろんなアイデアがあろうかと思いますので、ぜひそういうこともこれから活性化の会議の中で具体的なことをぜひ出していただきたいなと思います。ありがとうございます。

それでは、最後になりましたけれども、紀宝町長さん、お願いします。

（紀宝町長）

先ほど来、知事さん、また渡邉先生のお話をお聞かせいただきまして、大変そういった思いの中で、「文化力」、また自然を思いながらこの地域の振興を図っていこうという基本的な理念の中では、大変いいと言ったら失礼ですが、この地域の本当にこれから大事な問題ではないかなと、そんなふうに思っております。

私どものほうも、いろいろと自然・文化活用ゾーンという知事さんのお話の中でいただきまして、そういった思いでこれからもまちづくりに取り組んでいかなければならないと思っていますし、特に私どもの町では、これまでも「ウミガメの保護条例」というか形の中で、自然をしっかりと享受しながら、それを生かしながら地域のＰＲもしてきたわけでありますけれども、いかんせん、最近は残念ながら海岸浸食でウミガメの上陸も、ゼロとは言いませんが、本当に少なくなりまして、大変そういった自然を守っていくことに苦慮いたしておるところでございます。やはり自然・文化力と言いましても、自然を守るということがやっぱり一番大事ではないかなというふうに思っております。

それと併せて豊かな自然の中でこの地域の特性を生かして、ホタル祭りとか、冬には光の祭典のイルミネーション、これを私どもの田代公園というところでやっているんですが、かなりお客さんも見えていただきます。でも、そういったことによっておそらくと言いますか、自分で自負をしておりますが、私どもの町を中心に、最近冬になりますといろいろと新宮市を含めてイルミネーションが非常に盛んで、夜になると非常に明るい町並みが形成されてきているのかなというふうにも思っております。こういったものも自然を生かしながら、また「文化力」を培っていけるのではないかなと、そんなふうに思っておりまして、これなんかもじっくり進めていきたいと思います。

そういったことの実施をする上においても、これはやはりボランティアの皆様方がすべてやっていただいているわけでございまして、それぞれの地域、市町村でも若手の方がたくさん取り組んでいただいていると思いますが、私どもの町の事例で申し上げますと、そういった形でございまして、まさに「新しい時代の公」という状況になるかどうか、ちょっと疑問はあるにしても、やはり地域住民の皆様方の力を借りて、地域を盛り上げていくということが一番大事ではないかなということで取り組んでおります。

それと併せて、熊野古道の中で熊野川が川の古道という「川の参詣道」で登録をされているわけでございまして、国、県の大変なお力添えをいただいて、３年間かけて「体感塾」というのを作らせていただきました。これも今、民間で立ち上がっているわけでありますが、この体感塾、本当に川の生活に触れてみて、その地域の文化と歴史を知っていただこうと、そういった思いで体験していただく、体感していただくということを目的に「体感塾」という形でさせていただいております。

ただ、こういう自然と歴史を統合した中で取り組みをさせていただいているんですが、いかんせん、宿泊という形になりますと、先ほど先生もおっしゃられましたように、日帰り客がほとんどということで、私どもの町内の中にも大きな観光ホテルの本社がございまして、そちらのほうも最近の宿泊の状況を見ておりますと、昔のように宴席を設けてという観光客はほとんどないということで、ざっくばらんに言いますと、食事はバイキングで済ましてしまうとか、そういうふうに安く泊まり食べる、そういったような旅行形態になってきているということでございますので、やはり地域の中でもてなしたり、地域の良さ、食生活、そういったものを本当に感じていただける、そういったようなこれからの地域の、知事がよく言われる「文化力」を生かして歴史を生かした取り組みが、やはりこれから一番必要になってくるんじゃないかなというふうな思いをいたしているところでございます。

それと、当地域はもともと森林と備長炭、それから海もありますが、そういったもので生計を立ててきたという歴史があるわけで、特に森林が先ほど少し上向いてきたというお話をいただきまして、大変嬉しく思っておりますし、またそういった形について守っていく力が今、後継者を含めて大変な状況にあるということでございますので、そういったこともやはりこれからの大きな課題かなというふうに思っておりまして、ぜひともお力添えを賜れれば、またいいお知恵があれば教えていただければと思っております。

それともう一つは、熊野市長さんもおっしゃられましたが、私のところも今、総合計画の策定をしておりまして、アンケートをさせていただきました。これは市長さんにもこの前見せていただきまして、まったく同じ内容でございました。やっぱり安全・安心が第一でありますし、高規格道路（道路網）の整備、だいたい同じぐらいで１位、２位、差を付けられない程度でございますが、それほどの思いがございました。

そういった意味では、今まで培ってきた森林の技術・ノウハウを生かしながら、安全・安心な家ですよ、在来工法ですよと、そういったことをさらにＰＲしながら、やっぱり木材の良さというのをＰＲしていく必要もあるのかなと、そのような思いもいたしておりますので、それらも含めて一つ今後、皆さんとともに話し合いをさせていただいて、いい意見が出てくれば大変ありがたいというふうに思っております。以上でございます。

（渡邉）

どうもありがとうございました。やはりこの「文化力」という面から掘り起こして、さっき何人かの市長さん、町長さんがおっしゃったように、やはり少しでも地元で雇用の場を作っていく。雇用の場ができるためには、当然お金の回るような仕組みを、小さいながらも作っていくということが必要なので、それが観光交流産業であり、それを一次産業も全部含めた形の総合産業ということで私も申させていただいたわけで、国のこの「文化産業」というのも同じことだろうと思うんですね。

だから、そこを具体的にどういうところから始めていくかということで、先ほどこの熊野古道センターの活用、それからまもなく出来上がるところの紀南の交流施設、これをどういうふうに活用していくか、そのあたりから、そこにどういうふうにできるだけ定期的に人を呼び込んでいくか、その人も国内だけではなくて海外の合宿だとか、そういうものも呼び込むという、相当大きな戦略、ＰＲも含めて戦略が必要だろうというふうに思います。

そこのところで私が聞いているところでは、県がここ何年かかけて観光のＰＲの会社を

お作りになったんですよね。お作りになったと言うか、育成をされたと言いますか、そういうようなところにぜひ働きかけて、当然、伊勢のご遷宮のＰＲということと、このへんの熊野古道のＰＲ、その両方が非常に大きな会社の仕事だろうと思うので、そこのところをぜひ観光局ともタイアップして進めていただくような手立てを、具体的に相談されたらどうでしょうか。

では、知事さんのほうから、ぜひよろしくお願いします。

（知事）

いろいろと皆さんのほうも本当に知恵を何とか絞って、どうしていくかということで非常にご苦労されながら取り組んでおられると。しかし一方で、やはりこの機に何とかしなければいけない、それをものにしなければいけないという、非常に積極的なお立場で取り組んでおられるのを実感しました。

それで、実は出ていたお話の中で、若干私のほうで少しコメントしておきたいと思うんですが、熊野市長さんが、「文化力」に絡んで、文化で飯が食えるかという話がすぐ出ると。「花いっぱい運動」の時にそういう話が出たということなんですが、実は文化というのは、とかくこれまではそういう考え方でとらえられがちであった。しかし、実は環境問題を考えた時に、企業にとって企業活動で、昔は環境問題と言うと相反するものでありました。しかし、今日の時代というのは、まさに環境ということをやっぱりしっかりとらえて、その環境との共生、あるいは環境に優しいという、そういう商品を生み出すなり企業活動をしなければ、今度は社会がもう受け付けない、こういうふうな時代になってきております。

そういう意味では、文化ということも、同じようにこれからとらえていく時代ではないかと。私は、まさに成熟化してきた時代であるからこそ、これまでのただ単に経済的な、要するに団子だけの話ではなくて、やっぱり花が大事ですよという話がしっかり合わさると。こういうふうに思っています。

そこで、もう一つちょっと申し上げておきたいのは、実は県のほうで入り込み客の増加に伴うところの経済効果について、その効果を計算し直しました。し直しました結果、これまで実は県が思っていた経済効果よりも、はるかに重い経済効果があるということが分かってきたんですね。ただ、これは伊勢志摩については相当なものなんですが、残念ながら紀州においては経済効果はそう多くないという実態があります。

実は、よく観光の経済効果を言う時に、100 万人入り込み客が増えれば、経済効果はどれだけあるか、三重県全体平均として 180 億円、そして雇用効果として 1,800 人と、こう

申し上げてきました。ところが、実は最近計算し直しましたら、伊勢志摩においては 100 万人増えることによって 333 億円の経済効果、雇用効果としては 3,500 人を上回る効果があるということが分かりました。

これは県内のほかの地域について見てみますと、一番経済効果がないというところが伊賀地区でありまして、伊賀は 100 万人増加しても 199 億円、そして雇用効果として 2,243 人というような数字です。

東紀州ですが、東紀州では 100 万人というちょっと大きなラインで言いますけれども、10 万人とかそういうのは割ってもらったらいいだけの話ですので。100 万人増えることによって東紀州では 241 億円、そして雇用効果としては 2,599 人ということなんです。

実は、この際、これに一番係わる問題は何なのかと言いますと、実は観光客、来る一人一人がいくらお金を落としていくかということが、実は一番大事なことなんですね。そこで三重県では、これを推計してみますと、日帰り客では１人だいたい 9,700 円を消費すると。宿泊者は 36,804 円という、そういう数字が出ているんですね。

これはしかし、東紀州もどこもかも入れての県の平均ですが、では、東紀州は果たしてどういう消費が行われているか。まず第一に考えなければならないのは、宿泊する人がまず少ないということが一つあります。それからもう一つは、宿泊すれどその宿泊費用も、多分伊勢志摩のほうでしたら単価的に２万円前後はざらにあるでしょう。しかし、こっちのほうだと、民宿系だったらそんなには要りませんね。多分２万円取るような宿泊所というのは、『季の座』のいい部屋に泊まったらそれぐらい取られるか、どうでしょうかね。

そういうことから行きますと、まず宿泊する人も日帰りの人も、どうやってお金を落とさせるか、ここがないと、実はなかなか地元への効果が出てこないわけですね。それがうまく行くと、実は経済効果、これはもうその会社だけではなくて、その会社で使っておるものの原材料を作っておるところ、生産しておるところ、すべてにそういう効果が行って、全体が出てくる、潤ってくるということになります。従って、そういう数字をどう上げて行くのか、この単価もどうやって上げていくか、そういうことをしっかりまず基本に置いて取り組んでいく必要があるだろうと、こういうふうに思うところであります。

そこで、渡邉先生のおっしゃっていただいた考え方等、これはもうまさに皆さんも、その先のより具体的な経営回し、取り組みをどうしていったらいいんだと、こういうことになるんだと思います。

そこで、今日はこういう市町長さんらとの意見交換の場でありますから、ぜひセンター

所長も含め、今日は県の３人の部長も来ておるわけでございますから、そういったところで実は皆さんとの認識、これを共通に持つということをスタートに、これをより深いレベルに掘り下げていく。その前には、むしろもう担当の皆さん同士でのやり合いというものに深めていかなければいけないだろうと、こう思うので、今日は実にさまざまなアイデアもご披露されました。驚くばかりのアイデアもございました。それについては、それをどういうふうに評価し、そして具体的な工夫の仕方があるのかどうか、そして、やる場合にも役割分担、あるいはともに協力する、どういう方法で協力していくのか、こういったことに掘り下げていければいいのではないかなと、こういうふうに思ったところでございます。

いろいろありましたが、あと具体的なことについてのコメントはちょっと避けておきたいと思います。

もう一つだけ、渡邉先生のお話がありましたので申し上げておきますと、実は渡邉先生のほうから、「アジア・ゲートウェイ戦略会議」が「日本文化産業戦略」というのを出した。この中でも実に本当にたくさん、私の専売特許の「感性」とか「文化」というのを使っていただいておるなと思うんですが、実は同じ頃にやはり経済産業省、これは「アジア・ゲートウェイ」ですから主管庁は国土交通省ですかな。あ、首相官邸ですか、直轄なんですね。実は経済産業省がつい先週の初めに、「感性価値創造イニシアティブ」という政策を甘利大臣が発表しました。これは、日本独特に育まれてきた感性というもの、それの活用の仕方で、これは経済価値を持つものだと。その価値を持っているものを日本の物づくりと合わせれば、また新たな展開に結びついていくんだと。こういうことで、日本はやはりこういうふうな形でイノベーションを次々続けていくというのが、日本の生き残りの大事な戦略であるということを、実はここで経済産業省は言っているんですね。

それから「文化力」ということについては、去年、経産省が出しました「新経済成長戦略」の中で、「文化力」という三重県が使っておる言葉をちょっと使わせていただきましたと、大臣からあとで礼状が来たんですが、新経済成長戦略の目指す将来の日本の姿として、実は表現したものでありまして、それは、人も元気、地域も元気、そして産業も元気な、そういう非常に「文化力」が高まった地域の姿、地方の姿、これを経産省として「新経済成長戦略」の中で目指していくんですよという表現に使っておるわけですね。

実は「感性」とか「文化力」とか、非常に曖昧な、分かりにくい、分かりにくいと言っておるんですが、実は県議会よりもはるかに東京の、お江戸のお役所が進んで、実はもう

こういう言葉を使い出した。「美し国」というのも、安倍さんに「美しい国」として取られるやら、宮城県が今度は真似ようとするやら、しかし、発信は三重だということを分かってもらったらいいのではないかなと思っておりますけれども。

そういうふうなことで、「感性」というものが、実は中国は今は「安かろう、悪かろう」ではなくて、もう「安いけれども、いいもの」を出してきましたね。しかし、ものの価値というのはいいから売れるのではない。いいから使ってくれるのではない。だから、いいものを提供しても、今の時代は通用しない。いいものというのは作っているほうが、出しているほうが自分の独りよがりで言っているだけであって、相手は感性で受け止める。相手がいいと言っても、自分にとって好きか嫌いかなんですよね。

従って、実は付加価値を高める、ブランド化するといった、さっきのようなことも、やっぱりそういう意味では、来ていただく相手（顧客）の感性にしっかり訴えるものでなければ意味がない。だから、こっちの目線で「これはいいんですよ、これは最高の品質です」なんて、いくらそんなことを強調しても、そんなことは意味がないんです。相手にとって自分が好きだ、高く金を出しても買いたい、こうでなければ使ってくれない。僕は、そういうものの考え方で今後組んでいかないと、こっちの独りよがりの「いいから」「悪いから」ということで取り組んではダメだと、こういうふうに思います。

（東紀州対策局長）

私どもも今、観光の関係でいろいろな取り組みをしている中で、最近ちょっとおもしろいなと思ったのが、今まで熊野古道を訪れる、観光で来られる方は隣接県が多いんですが、首都圏のほうとか遠いところの情報発信が足りないんじゃないかということで、私どもではそういった取り組みをしていますけれども、そこで東京のカルチャーセンターで、朝日新聞のカルチャーセンターとＪＴＢのカルチャーセンターでいろいろやっている中で、実際に来たいという方が現れてきていますので、その方が旅行していただけるようなことを組もうとした時に、やっぱり大手の旅行会社がそんな小さなものに取り組むわけにいかないということがございまして、手づくりでやり始めておりますけれども、こういったところというのは、観光まちづくり公社が今後取り組んでいくような大事なところなんじゃないかなと思いまして、あまりにも小さいところで取り組むのもあれですし、かと言って大手の旅行会社でも相手にしないというところがございます。

そこで今、竹内敏信先生のような写真家の先生がいろいろ間に立っていただいたりして、写真で来るツアーであるとか、仙台でもカルチャーセンターを実施しましたら、仙台から

十数万かけて 20 数人が来ていただいたりとか、最近は北海道からも来ていただいたりしているようですが、仙台は私どもで組ませていただきました。

東京も今組んでいるんですが、やはりそこで組んでみると、やっぱりちょっと伊勢は寄りたいなと。伊勢に寄ってすぐこちらに来ていただいて、『季の座』に泊まっていただいて、こちらの熊野の本当の魅力のあるところ、それはカルチャーセンターで自分たちが勉強し学んだところを実際に見たり、そこを見ていただいて、で、やはり２泊目は和歌山の湯ノ峰で泊まっていただいて、そして白浜に抜けるとちょうど夕方、羽田に帰れる便があるそうなんです。そうすると、東京の方で安い旅がしたいという人は伊豆であるとか、いっぱい周辺にありますから、わざわざこちらに来ないと思うんですが、やっぱり熊野の魅力を本当に感じられた方は、お金を出して来られますので、そのように飛行機もうまく使いながらやると、御浜町長さんがおっしゃいましたが、伊勢と熊野がつながったような形でないとやはりうまくいかないということもございますし、そういうようなことが本当に組めると、宿泊がきちっとしていただけるような旅が組めるのかなと。そのためには、やはり観光まちづくり公社も旅行業の資格を取って、やれるようなこともしていかないといけないということも見えてまいりました。

それと、観光消費額の関係ですが、非常にこれは私どもも大事だと思って、紀南中核交流施設を作る計画のところで、エムアンドエムが、私どもがお手伝いをさせていただいて試算をきちっとした形でさせていただいたんですが、初年度宿泊者が 13,500 人、日帰りの実数が 12 万 5,000 人、そして宿泊者の消費単価が 12,000 円ということで、計算をしていきますと、初年度４億 3,000 万の売り上げになります。それの経済波及効果が 11 億 2,500 万ということでございます。最終的に、その 10 年後の形では８億ぐらいの売り上げが見込まれますので、その際には 20 億 7,500 万ということで、紀南中核交流施設だけではそういった効果がございます。

最近、国交省で出されました、新聞にもちょっと出ておりましたが、国全体の観光消費額が増えると経済効果がこれだけですという計算がいろいろ出されている資料を見ていましたら、そこで例えば大分県の例が出ておりまして、日帰り観光客を宿泊客に転換させて、宿泊客数を４％伸ばすとどうなるかということでいろいろ計算していまして、そういうところからさらに、日帰り１人当たりの観光消費額を 10%増加させると、例えば雇用誘発効果が従前であれば 600 人のところが 2,400 人になるとか、付加価値誘発効果が 32 億しかないのが 129 億になるとかいうことが数値で出ています。

私どもも３月ぐらいからずっと、私も伊勢志摩の観光消費額と東紀州を比べましたら、宿泊者の単価で行きますと、東紀州は 27,000 円、伊勢志摩は 40,000 円近いんです。一方、観光入り込み客数は５年で 30%伸びているということですので、やはり入り込み客は伸びても消費額が伸びないから、この地域はいけないんだと思って、一生懸命さらに調べていきましたら、どうもその数値の信頼性がまだまだ十分ではありませんので、今後そういったことがきちっと調べられるようなベースを持ちたいなということを思っています。

その上でそういうふうに考えていくと、取り組み方がやはり観光産業ということで、渡邉特命学長補佐がおっしゃいましたように、ビジネスプランをもって考えていくというパターンに入ってくると思います。

国交省も、「観光マーケティング支援マニュアル」というものを出しておりまして、もう観光に「マーケティング」という言葉をはっきり入れておりますので、そういった関係で観光まちづくり公社のほうもそういう発想をきちっと取り入れて進めていけるように考えていきたいと思っています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

（渡邉）

それでは、理事、お願いします。

（政策部理事）

時間が押してきておりますので、簡単にお話させていただきます。

今日は部長さんとこういう場でこれからの地域づくりについてお話をさせていただくようになったわけですけれども、これからは、先ほど知事が申しましたように、市町の行政担当者の方と県民センター所長を交えて私どもが参画させていただく中で、これからの地域づくりについての話し合いをしていきたいなと思っています。そういう中で、これからこの地域が目指す地域の方向性を見極める中で、我々としてどんな支援がしていけるのかを考えていきたいと思います。

今、県庁は、知事のもと、質の行政改革ということに取り組んでおりますけれども、ある意味では地域経営の質の改革というふうに我々は歩みを踏み出していかなければならないと思っています。そのためには多くの方が参画する中で、この地域をどうしていったらいいのかという議論の中で、将来の地域経営の担い手を育成していくということも考えていきたいと、このように思っていますので、今後ともよろしくお願いいたしたいと思います。

（政策部長）

観光面で、素人っぽい私のアイデアなんですが、この前、「（仮称）黒潮街道構想」というものがありまして、260 号から 311 号に非常にきれいなところがあるという話も聞きました。確かに素晴らしいと思いますし、先ほど御浜町長さんが紀勢国道、高速道路の開通までに準備すべきことは何だろうかと、そんなことをおっしゃいましたが、やはり高速道路は素晴らしい、けれども、それで行き来していてもつまらないですから、高速道路を使って、そういった黒潮街道を使って、熊野古道を見て、村々の祭りを見てというような、周回路のような構想ができるといいんじゃないかなと、素人っぽく思いましたので、単なる感想でございます。

（渡邉）

それでは一言ずつまた。

（熊野県民センター所長）

私は紀南出身ですので、いろいろな形で紀南の首長さん方とお話することもあるんですが、私どもの熊野県民センターとしては、やっぱり防災というような形で、地震のことでいろいろな形で、地震が来た時に津波が大事ですよということで、住民がしっかりとしないとダメですよというふうなことを啓発してきております。まさしく防災の関係では住民がしっかりと分かってきたと言うと悪いんですが、大変だなということは今分かりつつある。

それと同じように、先ほど御浜町長さんが言われたように、この６、７年の間に高速道路が来るわけです。従って、先ほど言われたようにストロー現象が起こる可能性があります。従って、僕はぜひ住民の方々にもそういう現象が起こるよという啓発と言うか、行政なりのことをやっていかなければ、僕は大変な時が来るのではないかと思っています。

私は本当に個人的に、紀南は自分のふるさとですので、エムアンドエムが今度来ますけれども、ぜひエムアンドエムだけが元気になるのではなく、地域の皆さんが元気になるような形でやっていきたいなと。そのためにもやっぱり地域の住民の方々に分かっていただけるような、そういう啓発というのがこれから必要ではないかなと思っております。

ちょっと簡単な感想なんですが、そのように感じていますので、よろしくお願いします。

（渡邉）

それでは、市長さんたち、もう一言ずつ、もう一回り、最後にということで。

（尾鷲市長）

一言ずつというふうに言われましたので。一言が二言になるかも分かりませんが。

今、熊野の県民センター所長が「ストロー現象」と言われましたが、私は、ストロー現象はみんな分かっておりますから、あまりあえて所長の口から言わないほうが、知事の命令一下で国と県あげて紀勢道をやっているわけですから、どうかプラス思考でお願いしたいということをお願い申し上げたい。

それから、これも私の少し言いすぎかも知れませんが、伊勢志摩が知事の関係で六本木ヒルズで３月１日でしたか、お木曳きをやって、伊勢志摩は首都圏にターゲットを絞ったと思うんですね。私は、それはそれで当然だと思うんです。伊勢志摩はもう名古屋圏の人や阪神圏の人からすれば、もう行きすぎて魅力がない、何度も何度も近鉄特急で行ったという印象が強烈にありますから、私は伊勢が首都圏にターゲットを絞って、首都圏の客あるいは関東の客を呼んでくるのは当たり前のことだと思います。

ですから、私たちは首都圏に対しては、勿論パイプは作りますけれども、あまりそこにウェイトを置く必要はないと思うんです。伊勢志摩に来た方が、その余力でこの地域に来てくれればいいというレベルで私はいいと思うんです。

それより私たちは、この紀勢道ができるわけですから、やっぱり陸路で来れる、車で来れると言ったらもう名古屋圏、これが７割ですよ。もっと紀勢道が南に、だいたいそういう方向に行っているんですが、もっとやっぱりこの地域というのは名古屋圏にターゲットを絞るべきだと、私は思っています。独断ですけれども、よろしくお願いします。

（紀北町長）

古道弁当でしたか、薬草弁当でしたか、あれがこの地域全体の調理師さんの協力によってできましたよね。あれは自然食ブームで売れているんですね。なぜかと言いますと、やっぱりＰＲがうまく、目立たないＰＲがものすごく効果を出しているんですよね。それを最近耳にいたしました。そういうものが一つでも二つでも作られていくと、徐々に元気が出てくると思っているんですよ。一つそんなところも考えていかなければいけないなと。

それから、熊野市さんが中核的交流施設、私、期待しているんですね。もう東紀州の弱点は宿泊施設なんです。それが少ないということなんですよね。おそらく効果が出てくるんじゃないかな。勿論、古道センターは古道センターで、あれは絶対活用しないといけないですが、宿泊のことにおいては期待しております。どうぞみんなで頑張っていきたいと。

（熊野市長）

一つだけ、熊野古道のお客さんがあまりお金を落とさないというのはよく言われる話なんですが、実際に宿泊客が増えていないのかと言えば、多分増えているんじゃないかと思

うんですね。宿屋さんとか民宿をやっている人に聞くんですが、なかなか数字は教えてくれません。

しかし、熊野市の例で行くと、ここ最近で４軒、民宿が増えました。これは多分スポーツによって年間２万人ぐらい、特に冬場を中心に入れているので、その進出しやすい状況を作ったということもあると思うんですが、熊野古道にお客さんが来ていなければ、熊野市で４軒も新たに宿をやるということはないはずなんです。ですから、非常に数字は掴みづらいんですが、効果がやはり出ているだろうというふうに見るのが正しいんだろうなというふうに思っています。

ただ、やはり目に見える形で出ているかと言うと、そこまでの実感はないので、やはり知事がおっしゃられたように、どうやってお金を落とすか、やっぱりこれは文化に対してはお金は出してもらえるだろうと。広い意味での「文化」ですね。おいしいものであったり、五感に感じるきちんとした、「おやっ」と想定以上の驚きをもって感じられるような文化に対しては、支払いは軽くなって出てくるんじゃないかという気がするので、やっぱりそういう部分を、さっきも言いましたが、どうやって作り上げるか、行政だけでもダメですし、やっぱり民間の皆さんの動きを我々としてどうやって支えて、よく言うんですが、先頭を切るんじゃなくて、後ろから押していくという形で取り組んでいくことが必要だろうなというふうに思っています。

それから、政策部長さんがおっしゃった話は、実は私は市長になってからずっと言っているんですね。260 号線を、伊勢に七たび、熊野に三たびだから、260 号線を活用しようと。今回高速道路ができると。伊藤尾鷲市長さんもいろいろ動いていただいているんですが、「海の熊野古道」という発想で、高速道路をいかにして活用するか、もっと広い視点で伊勢との連動ということも含めて、やっぱり考えるべきだろうなというふうに思っています。

（御浜町長）

熊野市長さんが言われたことです。ストロー現象ということで言えば、東紀州は 50 年かけてしっかりとそのストロー現象の底にあると思います。だから何ら恐れるに足らないと。これから上がっていくということではないかというふうに思います。

それから、東紀州ということで言えば、私はこの仕事をやらせていただいてまだわずかなんですが、尾鷲・紀北のほうの気質と南郡・熊野のほうの気質と全然違うということをよく聞くんですよ。一緒に仕事をしていこうとする時に。しかし、それは名古屋や東京や大阪や全国規模で、あるいは世界の規模で見れば、目クソ鼻クソの類だと思うけど、しか

し、地元にいれば、やっぱりちょっとした違いが大きな違いとして印象されるということがあると思いますので、そういうふうな意味での気質の違いと言われるところを仲良く上手に付き合いをする、そういう技術も磨いていけば、いいことがいっぱい起きてくるのではないかというふうに思っています。

（紀宝町長）

最後ですけれども、先ほど来、やはり高規格道路はどんどん進めていただいてありがたく思って、ぜひとも早期完成をお願いしたいんですが、今よく言われているストロー現象の話なんですが、私も、ストローは別に臆するに足らずというふうに思っています。

そして、今、局長が言われたように、まさに白浜空港７時 20 分で東京に帰れますので、そうすると伊勢に泊まられてからグルッと周遊して帰ってくることができて、お客さんもおそらく先ほど市長さんが言われたように、中部や関西の人はもう飽きてきているのかなというところもあると思いますので、やっぱりターゲットと考える中では、これからはもう少し違った形のルートなり展開が出てくるんじゃないかなと、そんなふうな思いがしています。

それと、地域主権という話の中で、知事がおっしゃられました「こころのふるさと三重づくり」のキャンペーンとかイベントに併せて、先ほども「海の古道」というのがありましたが、私どものほうも熊野水軍の発祥の地ということでＰＲしていますし、九鬼水軍もございますので、そのへんをうまく何かチャンチャンバラバラでもできないかなというような思いもしますし、また自然を生かした部分については、日にちの限定もないので時間もありますし、じっくりと。

ただ、祭りとかはそれぞれの地域においては神社のお祭りはだいたい休みの日に合わせているんですね。ところが、隣の県で申し訳ないですが、新宮市の例えば速玉大社、これは私とこの諸戸船という船が出るんですが、諸戸船というのは、ちょうど私とこの旧鵜殿村の中に貴祢谷社というのがございまして、そこにイザナギノミコトをお祀りして、それを新宮速玉大社に移行したと。その時を再現したのが御船祭りということで、私どものほうからも船が出て、祭りが成り立っているわけですが、そのお祭りが平日なんですよね。平日と言うか日にちが決まっているんです。10 月 16 日ということで決まっているんです。例えばもう一つお灯祭とかあって、それも２月６日だったかな、決まっているんですよ。平日に当たると、もう子どももそこへ行けない、お客さんに来ていただくのも非常に難しいということになりますので、私は新宮のほうによう文句を言いませんので、知事さん、

今度ぜひともあちらにそんな話をしていただけたら大変ありがたいと思います。

特に地域の子どもたちの誇りと言いますか、ふるさとに対する思いという意味では、やっぱり祭りに参加するということが大事じゃないかと思いますので、今日は教育委員会の皆さんはお見えじゃないかも知れませんが、ゆとり教育の中の総合学習の中でも、地域の祭りが平日の時は昼から休みだという形ぐらいの何か思い切ったことも考えていかなければいけないかなと思います。私とこもやりたいんですが、なかなか思うように行かないものですから、全県的にできればありがたいと思っています。以上でございます。

（尾鷲県民センター所長）

今日はどうもありがとうございました。

一番最後に一言だけ、市町長さん方と違いまして、県の幹部の方に、熊野古道ですね。いろいろな大きな計画を県で立ててもらいます。熊野古道を知らずして熊野古道のことを語るなという話でございまして、私が農商部におる時は石垣部長に言いまして、年に２回、部で人を集めて休みに歩きました。ぜひとも知事に号令をかけていただきまして、１回は歩けと。歩いた上で文句があるなら言えということをぜひお願いしたいなと思います。以上でございます。

（渡邉）

だいぶ予定の時間を超過しておりますので。

今日はいろいろと勉強をさせていただきました。このブロック会議はさらに続けられるんだと思いますし、それから、私が座長をさせてもらっておりますところの紀勢道整備に伴う地域活性化検討委員会、あそこも２年続きますので、そこでいまいちテンポが遅いので、テンポを速めて、そしてまた地元に密着した調査、情報収集をしっかりやってくださいということを、私ちょっと言いましたので、それは坂野局長からも言ってもらったそうですので、ぜひそういう面で、今日いろいろ出てきたアイデアとか情報は、そういう場でグッと集約をして、具体的な動きにつなげたいというふうに思いますので、今日はいい勉強をさせていただきました。よろしくお願いします。

ありがとうございました。

（司会）

どうもありがとうございました。

（終）